

GLEAT × 週刊プロレス

WEEKLY PRO-WRESTLING

The Gleast 5year Adventure

2021年7月1日にコロナ禍の中立ち上がったGLEATは、
2026年7月1日に旗揚げ5周年を迎える。
団体にとって特別な日であり続けてきた“7・1”に、
今年はプロレス初開催予定となる
SGCホール有明で大勝負をかけるGLEAT。
波乱の中でもチャレンジと冒険を続けてきた、
その5年間の足跡を振り返る。

(撮影・北崎貴士／取材・戸井猛道)



GLEAT旗揚げ5周年記念大会
SGCホール有明に初進出!

★'26年7月1日(水) 第0試合 18:00開始予定



逆境の中の立ち上がり

—今回はGLEATと週刊プロレスのコラボということで、こちらの希望でG-REX王者のエル・リンダマン×鈴木裕之社長の対談を組ませていただきました。旗揚げ5周年記念大会が近づいてきましたが、「7・1」と聞くとどんな心境になりますか？

リンダマン まあやつぱり、橋本千紘の誕生日だなと。

鈴木社長 あと、飯伏幸太選手のデビュー日ですね。

—そこですか？！

鈴木社長 GLEATは毎年7・1が上期、12・30が下期のビッグマッチなので、その2つが区切りでもあり目標というか。

—2020年10月にプレ旗揚げをおこない、本旗揚げが翌年2021年の7・1でした。

鈴木社長 親会社になったNOAHさんと1年でお別れる形になってすごく傷心してんですけど、そこにWRESTLE-1さんの解散が重なって。NOSAWA論外さんから「カズ・ハヤシさんと会わないか？」という話をいただいたのが始まりですね。

同時期に田村潔司さんと「女子でUWFをやるよ」という話もしていて、何かを起こしたいっていうタイミングが全部重なっていった。結果、NOSAWAさんはプレ旗揚げ当日に離脱することになったんですが(苦笑)。

—そこへ#STRONGHER RTSが合流する形になりましたが、その話を最初に聞いたときの印象はいかがでしたか？

リンダマン コロナ禍で中国に行けなくなると、日本でいろんな団体を回った時期で。新しい団体についても何もわからなかったんですけど、可能性を信じて不安は見ないフリして生きていくのがフリーですから(苦笑)。

鈴木社長 コロナ禍のタイミングも最悪でしたけど、そこに逆にやりがいを感じたというか。私自身プロレスファンを何十年もさせていただいた中で、この手の形で成功した団体はほぼなかった。だけど「逆にこれを成功させられたら自分にとっても生き甲斐を感じられるんじゃないか」と。

—旗揚げ当初は「どうせ1〜2年で潰れるだろう」という厳しい声も散見されていました。

鈴木社長 ありすぎましたね(苦笑)。ただ、カズ・ハヤシ、伊藤貴則、渡辺壮馬から始まって、飯塚優、田中稔、松井大二郎、河上隆一、田村ハヤト、ストハー、いろんなものが引き寄せられていて、パンデミックの中で自分に活力を与えてくれたのが、GLEATだったのかなと。

SGCホールへの挑戦

—旗揚げ戦をTDCホールにした意図はありましたか？

鈴木社長 GLEATならではの



イメージと世界観を作りたいというのがまずあって、すり鉢状で四方ではなくステージがあるというのが理想的で決めました。

リンダマン 演出もカッコよかったですけど、実は僕って本当に緊張しいので。マイクでしゃべるときも足震えてるし、毎回「やれるのかな」って不安を抱えながら、それをバレないように「オレしかないだろー」って口から吐いてやっています(苦笑)。

—7・1は前半がG-PRORで後半がLIDET UWFになる場合が多く、伊藤選手が4大会連続でメインを務めました。

リンダマン 対戦相手がSHO、永田裕志、フジタJrハヤト、中嶋勝彦で、ずっと負けっぱなしですけどね(苦笑)。それで、去年のメインが中嶋勝彦と石田凱士のG-REX戦。僕も最初のG-REX王者だったときに、井土徹也と防衛戦をやっていますね。

—TDCホールでの開催が定番化していた中、去年の会場がCI TY HALL & GALLERY GOTANDAになったのはなぜだったのでしょうか？

鈴木社長 去年は暗い話もいろいろ多かった中で、今まで一度も7・1を完全完売でやったことがなかったんです。だから初心に帰って、まずは完全完売というものを達成しようよと。それをクリアできたから次が見えてきて。

—旗揚げ5周年は今年3月にオープンしたばかりのSGCホールという挑戦になります。

鈴木社長 1年に1回は挑戦しようよという話してたら、いろ

「今は再構築の第二創業期にあると思っています」(鈴木社長)



「お客様ともっと強く手をにぎり合っていく1年に」(リンダマン)

でも、暗雲立ち込めていた11・3横浜BUNTAIで、私がライブで見たCIMAの中でも、最強最高にカッコイイCIMAをみせてくれた。やっぱり「CIMAあつてのGLEATの5年」というところはありましたから。

非常に残念ではあったものの、それを断ち切って自分たちの時代にしようというリンダマンの挑戦でもあって、これも結果論ですけど、昨年の12・30新宿からものすごく会場の雰囲気明るくなって、新しい創業期を迎えるのかなという気がしてますね。

PROFILE



える・りんだまん／本名＝林悠河。95年2月12日、東京都中野区出身。161cm、80kg。'14年4月4日、DRAGONGATE NEX、兵庫・ドラゴンゲートアリーナ、対T-Hawkでデビュー。'21年のGLEAT旗揚げに合流し、体格差をもともしない果敢なファイトでG-REX王座を2度戴冠。力強く団体をけん引する。



すずき・ひろゆき／本名同じ。70年6月24日、埼玉県さいたま市出身。02年に総合広告代理店リデットエンターテインメントへ入社後、09年より代表取締役社長に就任。新日本プロレスの広告代理、長州力興行、プロレスリングNOAH親会社などを経て、'20年プロレス団体GLEAT(グレイト)を設立。

んなご縁から今回のSGCホールでの大会開催をご提案いただいた。日本最高峰のスピーカーシステムも搭載しているそうで、音響の部分なども楽しみですね。

——実際に新会場の外観を見た印象はいかがでしたか？

リンダマン 内観はまだ見れてないですけど、TDCのさらに1.5倍くらいと聞いてて。スゴクキ

集大成から第二創業期へ

レイで大きな会場ですよ。まあ、両国国技館も大阪府立第1体育館もやっけてビビリ慣れますけど、「音がスゲー」ってなるのもリングに上がるときまでわからないものです。後は実際にリングに立ってみてですね。

——振り返るとやはりGLEAT

の5年間は、苦境の中での挑戦の連続だったと思います。

鈴木社長 会社を潰してまでつてのはないですけど、大きいリスクを背負って立ち向かっていく姿勢を見せるのがプロレスだと思ってる。去年に財務状況の部分まで週プロさんの取材で赤裸々にお話して、「このままでは続けられないから7月1日までに判断する」と話して、結果何があっても継続するということを決めて。

——昨年はCIMA選手の離脱という激動もありました。

鈴木社長 昨年10月の後楽園でリンダマンがリング上にCIMA選手を呼び出してから、毎日生きた心地がしない日々を送り。それまで仲睦まじくやっていたものが、急に連絡も取りづらい関係になって、本当に試合が成立するのかというところでしたよ。

リンダマン 闇雲にやっただけではあるんですけど、雰囲気も確実に上向いてきて、みんなが楽しんでやっけてる。これは仮説ですけど、「選手が伸びようとしてなかったら、お客様も伸ばそうとしない」のかなと。みんなが能動的に動いてるからこそ、お客様も選手と手をにぎり合っている感覚が生まれるのかもしれない。

——最後に、5周年の7・1へ意気込みをお願いします。

鈴木社長 今年の7・1は、ズバリ5年の集大成を見せる大会になります。その先の6年目も、ゼロからではないにしろ再構築の第二創業期ではあると思うので。まずは選手もファンもみんなに楽しんでもらう中、これからも挑戦を続けていきたいと思っています。

リンダマン やっぱ去年はゴタゴタやネガティブな話題があって、信頼を失うと取り返すのには倍以上の労力と時間がかかると思うので。まずは信頼をしっかりと積み上げて、お客様ともっと強くにぎり合っていく1年にしたいですね。オレたちも頑張ってるGLEATしていくので、みんなも一緒にGLEATしてください！

▼河上を除く、旗揚げ戦の所属選手たち。それぞれが大きな夢と野心を抱いての船出となった

★'21年7月1日=東京・TDCホール



無限の可能性とともに ベンチャー団体の船出は

新日本から襲来したSHOがメイン勝利 河上がエース筆頭格のT-Hawkを撃破



▲オープニングマッチはリンダマンvs田村。バキバキの肉体を作り上げたリンダマンがジャーマンで快勝。田村は3カ月後に入団となった



▲方、エースと見られたT-Hawkは惜敗に呆然。「若大将とか言っておいて負けたのはクソサイイと思ってるよ」(T-Hawk)

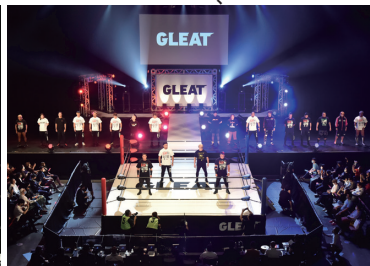


▲メインは伊藤貴則vsSHO。不慣れなUWFルールの中でも抜群の適応力を見せたSHOが三角絞めで伊藤を下した

▲G PROのメインはT-Hawkvs河上。無骨なイメージから生まれ変わった河上が、サンダーボルトで勝利をおさめた



▲メイン後は若手たちが自らの言葉を次々とリングから発信。「GLEATするかしないか、答えはひとつ。いくぞみんな、GLEATについてこい」(リンダマン)



▲洗練された演出もGLEATの特色に。ストリートファイターIIの作曲でも知られる下村陽子さんによる勇壮な楽曲も華を添えた



▲女子UWFの試みとして、福田菜耶が橋本千紘を相手にデビュー戦も、あまりにも強大な相手に手も足も出ず



▲「ストーリーの末っ子」の立ち位置を続けてきた鬼塚が、6人マッチでカズから快勝。元氣印としてGLEATを盛り立てる存在に

世界が先の読めない未曾有の状況に陥る中、チャレンジ精神と可能性を放った一夜だった。

最終試合のメインには、他団体参戦が非常にレアとなっていた新日本からSHOが登場。プレミアAMな一戦となるも、所属を背負って挑んだ伊藤が惜敗に。

一方、オープニングマッチではリンダマンが過去最高の肉体を作り上げて田村ハヤトに快勝。ストーリーの三番手のイメージを払拭し、駆け上がっていく。

T-Hawkがエース候補筆頭と目されていた中、大日本から金銭トレードにより移籍した河上がG PROのメインで勝利。それまでの無骨なイメージを塗り替える闘いを見せるように。

当初はG PROとLIDEET UWFが別ブランド興行としておこなわれ、ビッグマッチにあたる「GLEAT」で両ブランドが融合。7・1はUWFサイドが、12・30はG PROサイドがメインとなる方式が定着していく。

20年4月にWRESTLE-1が活動休止となり、観客も声を出すことができず、海外からの招聘も困難なコロナ禍の中から、GLEATは立ち上がった。

▼情熱的な試合とマイクで大会を締め続けるリンダマンは、団体内で頭ひとつ抜けた存在になっていく

★'22年7月1日=東京・TDCホール



◀G PROMメインで井土がGREX X王座に初挑戦。無敗の勢いのまま、激しい打撃戦を繰り広げた



▲井土の勢いを受け止めたリンダマンが、最後はタイガー・スープレックス・ホールドでV3を達成



◀LIDET UWFのメインでは、伊藤が永田と対戦。伊藤は高田延彦をオマージュした紫のコスチュームで登場も、永田がバックドロップからのナガタロックIIで勝利



▶青木真也が参戦し、飯塚からUWFルールで快勝。このルールへの圧倒的な適性を予感させた



▲最後は所属選手たちが手を上げてエンディング。新日本プロレスワールドでのPPVもおこなわれた



▲女子部にはMICHIKOの古巣でもあるセンダイガールズから、DASH・チサコ&岩田美香&愛海が参戦。細川ゆかり&高橋奈七永とのタッグで迎え撃った



▲引退まで1カ月半のGammaが参戦し、CIMAとの“大阪06”が復活。Gammaは約2年後に現役復帰を果たした



▲SHOが再び参戦も、BULLET CLUB入りして1年前とはスタイルが激変。反則のレンチ攻撃を見舞い、6人タッグを制した

超人王者と化した リンダマンが圧巻防衛ロード

井土がGREX挑戦でリンダマンと激突 伊藤は新日本・永田裕志の前に敗れる



旗揚げから猛烈なスピード感で動き続けていったGLEAT。その中で圧倒的な疾走感で頭ひとつ飛び抜けた存在になっていったのがエル・リンダマンだった。
'22年2月に王座決定トーナメントがおこなわれ、初代王者となったリンダマンは、ベルトを持ったまま新日本のベスト・オブ・ザ・スーパージュニアに出演。その名を業界に響かせていく。

さらにクワイエット・ストーム、入江茂弘を下し、旗揚げ1周年で3度目の防衛戦の相手に迎えたのが井土徹也。HEAT-UPから野心を抱いてGLEATに移籍した井土は、当時若く22歳。フレッシュな20代の所属選手が多く揃った初期GLEATの特色となったが、移籍後の井土は無敗の快進撃を展開。「無敗」と「最速」でGREXを手にするにこだわりを見せた。

圧倒的な勢いに乗る井土をリンダマンが迎え撃った王座戦は「これぞGLEAT!」という疾走感をまとった熱戦に。最後は井土のスピンドレックをタイガー・スープレックスに切り返し、リンダマンが堂々V3を果たした。

新日本からも永田裕志とSHOが参戦し、新日本プロレスワールドでのPPVもおこなわれた本大会。コロナ禍が徐々に収束を見せ、国際色豊かな選手たちの参戦も実現する中、GLEATはそのグルーヴを加速させていく。

▼壮馬は臆ろとしながらも左右の掌底を必死に乱打。初挑戦となったMMA戦の奮闘を彷彿とさせる場面となった

★23年7月1日＝東京・TDCホール



初進出の両国国技館へ 壮馬が広げた翼

厳しき王者T-HawkがG-REX王座V2バルクに敗れた60secondsが解散へ



▲徹底的な厳しさで立ちはだかったT-Hawk。最後はナイトライドで壮馬のねばりを断ち切った



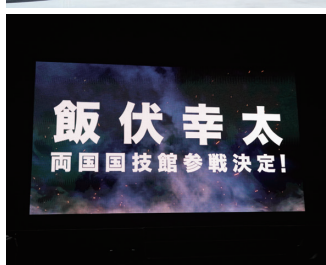
▲試合後には「オレらは元高校球児、夏は大得意だろ？世界中のどこよりも暑い夏にしようぜ」と、田村が8・4両国国技館でのG-REX挑戦を表明



▲全日本から宮原健斗が参戦し、リンダムン&橋本千紘とアメイジングなトリオを結成。強烈な個性でコーナーの奪い合いを展開!?



▶LIDET UWF最高峰の名勝負となった伊藤vsフジタJr.、ハヤト。ハヤトがK.I.Dで制し、初代王者の伊藤が初防衛に失敗。ハヤトが第2代王者に



▲大会ラストに両国国技館への飯伏幸太の参戦がサプライズ発表され、場内は強烈などよめきと割れんばかりの大歓声に包まれた



▲“リーダー問題”で河上への不協和音が続いたバルクだったが、最後は結束を復活させて勝利をつかみ取った

▲後にG-INFINITY 11度の防衛記録を作り上げるようになる斉藤プラザーズが、カズ&田中から初防衛に成功。最後は王座返上も、その記録は未だ破られていない



▲初期のユニット抗争を彩った60secondsが、バルクとユニット解散をかけて激突

G LEATにとって旗揚げ以来最大の挑戦となった、両国国技館初進出を1カ月後に控える形となった、3度目の「7.1」。

大会エンディングでは、新日本退団以降リングが遠ざかっていた飯伏幸太の電撃参戦が発表され、場内騒然。結果的に、この飯伏のインパクトにかき消されない闘いがひとつのテーマとなる。

60seconds、井土徹也&頓所隼&佐藤恵一とバルクオーケストラによるユニット解散を懸けた総力戦は、バルクが勝利。明確に明暗が分かれる形に。

メインでは初代王座決定トーナメントを制した伊藤貴則が、フジタJr.ハヤトとの初防衛戦に挑むも惜敗。病状悪化によりその後の防衛戦は1度限りとなるも、真つ向打撃戦はLIDET UWF屈指の名勝負を描き出す。

また、石田凱士との激闘を制して同年4月に第3代G-REX王者となったT-Hawkは、徹底的に若手に覚悟と変化を求めるシビアな王者となったが、そこに挑んでいったのが渡辺壮馬。

当時は純粹なハイフライヤーを追求していた壮馬だったが、GLEAT MMA初出場を経て新たな芯を身につけ始め、T-Hawkの叩き潰しに折れずに立ち向かっていく姿を見せていく。

誰もが向こう見ずなまでに可能性を求め続ける姿は、GLEATの姿勢を示すものだった。

▼32年のキャリアに終止符を打ったカズは、底抜けに明るいマイクで「新入社員宣言」をし、場内は大「カズ」コール

★'24年7月1日＝東京・TDCホール

GLEATの太陽として輝いてー カズ・ハヤシが万感の引退

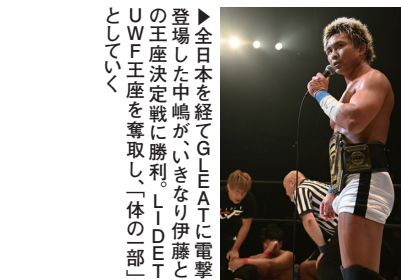
初上陸の中嶋がLEEDETT UWF王座奪取 G-REX王者・田村は飯野と大肉弾戦



▲引退試合もなんとG-INFINITY5度目の防衛戦に。「勝ち逃げ」を狙うIMA&カズと、挑戦者組によるスリリングな応酬へ



▲最後は、G-1に新加入した井土と石田のコンビネーションが決まり、石田&井土が第5代王者組となった



▶全日本を経てGLEATに電撃登場した中嶋が、いきなり伊藤との王座決定戦に勝利し、LEEDETT UWF王座を奪取し「体の一部」としていく



◀伊藤は鼻から出血しながら打撃を打ち合うも、中嶋がノーザンライトボムからの腕固めで勝利をおさめた



▲UWFルールに初挑戦したリンダマンは己のスタイルを貫くも、青木がグラウンドで圧倒して勝利をおさめた
◀メイン終了後にカズが呼び込まれ、10カウントゴングも引退セレモニーもなく、笑顔の胸上げでリングを後にした



◀総合格闘技の大家、ジヨシユバネットワークの初参戦が実現、飯塚とUWFルールで激突も、3分余りで勝負を決めた



◀G-REX王者となった田村が、飯野と真向肉弾戦を展開し、6度目の防衛に成功。ぜひまた続きを見たい闘いだ

GLEATにとって最大の、乱入者となったのが、中嶋勝彦の存在だ。'23年9月にNOAHを退団、直後に全日本に登場して独特な世界観で混沌を生み出す。その中嶋が次なる戦場として選んだのがGLEATであり、フジタ、Jr、ハヤトが返上したLEEDETT UWF王座を巡る、伊藤貴則との決定戦に勝利。刺激と混沌を巻き起こし続けていく。

4度目の「7.1」はその序章となったが、T-Hawkを下して第4代G-REX王者となった田村ハヤトは、DDTの飯野雄貴を相手に大肉弾戦を展開。そして、もうひとつ大きな注目を集めたのが、最初期メンバーのひとり、カズ・ハヤシの引退試合。「引退試合であっても未来を見せられる」と語ったカズは、タッグ王者のままの引退を宣言。

CIMAとのタッグで石田凱士&井土徹也を相手に、爛々と輝く目でスリリングな闘いを展開。この闘いは、GLEATにおけるカズの最高傑作、といえるものとなったが、石田&井土が意地で「勝ち逃げ」を許さなかった。

しかし、32年のキャリアに終止符を打ったカズは、底抜けに明るいマイクで「51歳の僕は、LEEDETTエンターテインメントの新人社員になります！」と宣言。そこに涙はなく、誰しもを笑顔させるファイナルの姿は、まさに、GLEATの太陽だった。

▼中嶋がG-CLASS制覇に続き、G-REXも奪取してGLEATの完全制圧を達成。「終わりじゃない、これからが始まりました。この2本のベルトを持つてる、中嶋勝彦がルールだからだ」(中嶋)

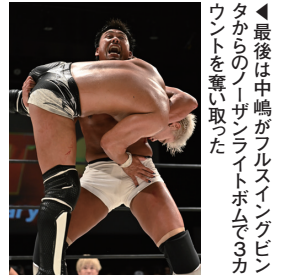
★25年7月1日=東京・CITY HALL&GALLERY GOTANDA



中嶋がGLEATを完全制圧 石田を下して2冠王に 会場を五反田に変えて初開催となった「7.1」 鬼塚がタッグ&G-RUSHのダブル防衛を果たすも…



▲石田は口から大流血となりながらも、一切怯むことなく中嶋に向かっていったが…



◀最後は中嶋がフルスイングピンタからのノーザンライトボムで3カウントを奪い取った



▲元WWEの超大物、エル・パトロン(旧アルベルト・デル・リオ)が参戦し、CIMAとのタッグで登場して快勝



▲会場は340人(超満員札止め)に。壁一面の特大大スクリーンが記念大会を彩り、11・3横浜BUNTAIの初進出も発表された
▶石川修司がサプライズ登場し、「トリプルラブホーク」T-Hawk&愛鷹&MICHIKOと、Evolutionの抗争が勃発



▶鬼塚は同日に、プラスナッククルJUNとのG-RUSH王座戦も敢行。2度目の防衛に成功していた
▶フィニッシュとなったのは鬼塚による、あざやかな「魂のシューティングスター・プレス」だった



▲山村と鬼塚の、高校で同級生だった2人がG-INFINITY王座をV2。多大な歓喜を生み出したが…

2025年のGLEATは経営状況を赤裸々に公開、「7.1」の恒例となっていたTDCホールから、会場をCITY HALL & GALLERY GOTANDAに変えて再始動を図る。

この日、鬼塚一聖はプラスナッククルJUNからG-RUSH王座を防衛し、さらに高校の同級生だった山村武寛をパートナーにG-INFINITYもV2。

2冠チャンピオンとしてキャリアの絶頂を味わうも、直後に契約違反により謹慎処分となり、鬼塚は引退を選択。この一件からこの年のGLEATは負のスパイラルに陥っていくことになる。

また、参戦当初はUFWルール限定の参戦を続けていた中嶋勝彦が、GPRO参戦を解禁し、同年4月に初開催されたシングルルトーナメント「G-CLASS」を制覇。王者の石田凱士は「オレが負けたらGLEATは終わり」と自らを追い込んでいった。

しかし、シングル無敗を続けた中嶋の牙城を崩すには至らず、中嶋がG-REXも奪取してシングル2冠王に。「誰からベルトを取り返すのか？」が、GLEATの最大の焦点になっていく。

年末にはCIMAの離脱という事件も生まれたが、そこからGLEATは団体の新たな形を作り上げ、熱と活気を取り戻している。5周年のリングに描かれる景色は果たして…。